

祈りのきずな 9月

詩編117編～146編

飯能教会（埼玉） 牧師 武林真智子（たけばやし まちこ）

1日(月)詩編117編 1節

イスラエルはどの民より貧弱であった（申7・7）にもかかわらず、主の慈しみは力強く、まことに満ちていました。主イエスがこの世に遣わされて、すべての民が、その慈しみを受けとる恵みが与えられました。だからこそ、すべての国、すべての民に、主を賛美し、主をほめたたえよ、と呼び掛けていくのです。

渋谷教会と金末仙宣教師、林雄植伝道師（東京・渋谷区）

2日(火)詩編118編 5～6節

私たちはこの世に生きる限り、人と人との関係性の中で、傷つき痛むことを経験します。しかし信じる者は、苦難の中で主を呼び求めることが赦されています。行き詰った時つまもなお、主は私たちに解放を与えてくださるのです。主が味方である以上、目の前の出来事を恐れることなく、主の慈しみはとこしえに、と歌えるのです。

青梅あけぼの教会と大谷唯信牧師、森元國文副牧師（東京・青梅市）

3日(水)詩編119編

アルファベットによる詩はいくつも残っていますが、この詩編ほど整えられたものは少ないでしょう。幼子は言葉を覚えると同時に、神の言葉がその体内に組み込まれ、成長と共に神の存在が確かになります。全体に、八つの言葉「律法」「法」「言葉」「掟」「命令」「定め」「指図」「仰せ」を配置し、律法の重要性を強調します。

ライフチャーチと大谷信道牧師（東京・三鷹市）

4日(木)詩編120編5～7節

著者は、異邦人の住む地で久しく耐えて生きています。その中で平和を語っても、戦いを好む人びとの心には届かず、さらに厳しい状況が待ち受けているのです。聖書の語る平和(シャローム)とは、単に戦いが無いことではなく、互いを意識しつつ生き生きと生きる動的な状況を指すのです。

恵約宣教伝道所と藤原淳^{ふじわら あつよし}牧師(東京・渋谷区)

5日(金)詩編121編7～8節

巡礼の旅は、危険な旅です。著者は愛する人の旅路に思いをさせています。その中で、主が昼も夜も、まどろむことなく守り、覆う陰となってくださるように祈ります。「見守る」という言葉を繰り返すことで、いかに主の守りの力が絶え間なくとこしえであるかを歌うのです。

東京西教会と黒瀬博協力牧師(東京)

6日(土)詩編122編1節

私たちは礼拝するために造られています。だからこそ「**主の家に
行こう**」という呼びかけの中に、その先に見える喜びの礼拝の風景を思い浮かべることができるのです。今も私たちは、主日礼拝の、共に礼拝する人びと、共に賛美する人びとの笑顔を思い浮かべ喜び集うことができるのです。

板橋伝道所と新保雅雄牧師(東京・板橋区)

7日(日)詩編123編

捕囚の民となった私たちは絶えず嘲笑^{ちようしょう}と侮^{あなだ}りにさらされています。まさに心が折れそうな状況です。それでもなお目を上げて主を仰ぎ、僕^{しもべ}、はしめたが主人の手に目を注^{そそ}ぐように、期待をもって主に目を注ぎます。どんな状況であっても私たちが憐れんでくださる主を待ち望むものでありたいのです。

関東プレインズ教会と熊手^{くまて}祥^{よしゆき}之執事長(東京・羽村市)

8日(月)詩編124編

主が私たちの味方である以上、私たちは決して独りで敵に向かうことはないのです。敵意の炎、大水、激流、どんな状況が襲ってきても、越えていくことができます。敵の餌食から、仕掛けられた網から逃れる鳥のように、救い出されるのです。私たちに助けを与える天地を創られた主のみ名があがめられますように。

福生教会と稲見元彦牧師（東京・福生市）

9日(火)詩編125編

主に依り頼む人・従う人と、主に逆らう者・悪を行う者が対比されて記されています。良い人、心のまっすぐな人が幸いになれない状況があるから祈るのです。私たちの中にも状況に応じて使い分ける事実があるからこそ、主イエスから教えられた「試みに遭わせず悪より救い出したまえ」と祈るのです。

昭島めぐみ教会と石橋虎之助牧師（東京・昭島市）

10日(水)詩編126編 5～6節

もし私たちが喜びの歌と共に刈り入れることができたなら、それはその出来事を信じて涙と共に種を蒔く人がいたからなのです。私たちが種の袋を背負うことができるのは、泣きながら出ていく人がいたからなのです。だからこそ、主の途方もない忍耐を信じ、主が蒔いた種を受け入れ、耕された土地を目指していきたいものです。

八王子めじろ台教会と小河義伸牧師（東京・八王子市）

11日(木)詩編127編 1節

私たちは、毎週礼拝する会堂や場所の直近の課題にすぐに目が行ってしまいがちです。しかし、主の促しを受けて多くの先達たちが共にささげものを携えて会堂が建てられていったことの恵みを思います。この場所に会堂を建てることに賛同してくださった方がたがいたからこそ、ここで共に礼拝できていることを感謝していきたいのです。

多摩みぎわ教会と石井規之牧師（東京・多摩市）

12日(金)詩編128編

ここでは、主を畏れる家長は、妻が家の奥にいて、食卓を共にする子らに囲まれ、多くの子らや孫を見ると歌われ、それがイスラエルの平和へと続くと告げられています。しかし、この世に遣わされた主イエスと共に、ガリラヤから旅をした女たちもまた、主を畏れる幸いを信じて生きてきたのです。

立川教会と文廷翼^{ぶんていよく}牧師、大川博之^{おほせ}名誉牧師（東京・立川市）

13日(土)詩編129編 6 節

「屋根の草」(列下19・26、イザ37・27)は、当時の人びとの共通の表現方法なのでしょう。種が飛んで屋根にある多少の湿度で芽吹いたとしても乾季には枯れてしまい、必要のないものとして引き抜かれるものです。主が、シオンを憎む者たちの繁栄を必ず断ち切ってくださることを信じて記すのです。

花小金井教会と藤井秀一^{しゅういち}牧師、中根^{なかつね}浄牧会スタッフ（東京・小平市）

14日(日)詩編130編 6 節

病院の療養生活や施設での生活の中で、最も孤独を感じるのは、眠れない夜です。何度も寝返りをしながら、詩編をロずさみつづきが与えてくださる新しい朝を待ち望みます。四交代制で夜回りが当時の街を守っていたように、病院も施設も夜を徹して働いておられる方がたがいてこそ、新しい朝を迎えることができるのです。

府中教会と長尾なつみ牧師（東京・府中市）

15日(月)詩編131編 2 節

「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」(マコ10・15b)と主イエスは言われました。大人の手助けがなければ生きていけない子ども、母の胸から取り去られては生きていけない命のように、主なる神が必要を満たしてくださることを信じ、沈黙の中で主を待ち望むのです。

調布教会と岡田千尋牧師（9/1より、東京・調布市）

16日(火)詩編132編

この歌は「都に上る歌」の中でも異色の長い歌です。ダビデとシオン(エルサレム)をほめたたえます。神の箱をシオンへと運ばせたダビデの功績と、油注がれる者(救い主メシア)がダビデの系図から起こされることを歌います。そしてシオンこそが神の憩いの場であり、人びとが巡礼に向かう場所であることを示すのです。

調布南教会と前田重雄牧師(東京・調布市)

17日(水)詩編133編 1 節

毎週の礼拝に集ってくる人びとを思うとき、自然に「**なんという恵み、なんという喜び**」と歌いたくなる思いが沸き上がってきます。一週間の中で、それぞれに労苦し、関係性の中で祈る日々を過ごしてきた方がたが、教会(主の家)を思い、週の初めの貴重な時間を取り分けて集い来たる歩みの先に主の導きを確認するのです。

仙川教会と山岸明牧師、井馬佐紀子副牧師(東京・三鷹市)

18日(木)詩編134編

3節の短い歌の中に「たたえよ」が組み込まれ、天地を創造してくださった主が私たちを祝福してくださっていることを喜び「たたえて」います。しかし、21世紀の現代社会は、被造物の呻きをないがしろにして、気候温暖化への反省を遠くにしてしまっていることを悔い改める必要を感じます。

三鷹教会と秋山献一牧師(東京・三鷹市)

19日(金)詩編135編15～18節

「**偶像を形づくる者は皆、無力**」(イザ44・9)と知りつつ、偶像にひれ伏し、自分たちの欲求を満たす神を求めるのは、昔も今も変わらないのかもしれませんが。当時の偶像には口、目、耳、鼻と人間に似せた姿がありましたが、現代人の欲求ははてしなく、偶像という怪物にも**あそばさる**私たちがいます。

中野教会と坂元俊郎牧師、坂元幸子協力牧師(東京・中野区)

20日(土)詩編136編

すべての節の後半に「感謝せよ。慈しみ(ヘセド)はとこしえに」と繰り返されます。創世記から出エジプトの記憶を辿り、歴史を超えて民を救い出し解放してくださる主なる神に感謝しています。礼拝の中で、司式者と会衆が交読する行為をもって、字を読めない民衆も共に神の働きと、契約の成就を知ることができるのです。
大久保教会と河野信一郎牧師(東京・新宿区)

21日(日)詩編137編 1～4節

遠くバビロンに捕囚として連れてこられた悲しみと怒りが描かれた歌です。「シオンの歌を一つ歌え」と嘲られ、断って琴をポプラの木々に掛けたと記します。日本にも紛争や政治的な弾圧で移り住んでいる人びとが大勢います。しかし、人権を無視したような入国管理局の態度には、怒りを禁じえません。
花野井教会と古賀公一牧師(千葉・柏市)

22日(月)詩編138編 7～8節

異郷の地で、苦難にさいなまれ、敵の怒りを受けながら、主が共にいてくださることを感謝するのです。主のみ手が近くにあることに確信を持つことができるから、主が救ってくださることを求め、慈しみがとこしえにあるように祈るのです。私たちも痛みや苦しみの中でこそ、主が共にいてくださることを近くに感じることができます。
栗ヶ沢教会と木村一充牧師(千葉・松戸市)

23日(火)詩編139編13～18節

新しい命が誕生することの不思議は、今も昔も変わりありません。どんなに医学や科学が進んでも、私たちが知りえる限界は僅かです。命の出来事はまさに宇宙の広がりを感じます。著者が内臓や骨という言葉を用いても、私たちが考えても、神のご計画によって一人の命が誕生し、高価で尊い存在であることに変わりありません。
富里教会と武井誠司牧師(千葉・富里市)

24日(水)詩編140編13～14節

私たちは「正しい裁判」を求めます。主なる神こそが、貧しい人の訴えを取り上げ、^{とほ}乏しい人のための裁きをしてくださると信頼して歌います。主に従う人だけが感謝できるのです。さいなむ者や不法な者に取り囲まれていても、救い出してくださる方の存在を知っているからこそ叫ぶことができます。

^{も ばら}茂原教会と服部^{こうじ}紘司牧師（千葉・茂原市）

25日(木)詩編141編 2 節

「**立ち昇る香り**」とは、神殿で行われる朝夕のささげものを思い起こします（出30・7～9）。高く上げた手を持って最高の祈りを現し、遠く神殿から離れた状況の中でもなお主を仰ぎ礼拝する姿を現していきます。悪を行う者らの誘惑に耐え、仕掛けられた罠や落とし穴^{おちい}に陥ることがないように祈り続けていくのです。

千葉教会と元川信治牧師、澤田ルツ子音楽主事（千葉・市原市）

26日(金)詩編142編(聖書協会共同訳)

「**ダビデが洞穴にいたとき。祈り**」と、題名が付けられ、緊張感の中でのダビデの思いや^{いきどお}憤りが歌われています（参照：サム上22・1）。主の前に嘆きを注ぎだし、苦しみを告げても、主が私の小道を知っていてくださることで「**あなたはわが逃れ場、…わが受くべき分**」（6節bc）と告げていくのです。

インドネシア伝道と野口日宇満・野口佳奈各宣教師のために

27日(土)詩編143編

私には今どうしても主の応答が必要なのです。私の祈り、嘆き願う声に耳を傾けてほしいのです。敵は私の魂に迫り、死者と共に闇へと葬ろうとしています。み顔を隠さないで助け出してほしいと懇願しています。み手の業は近くにあり、行くべき道が示されていたことを信頼して求めているのです。

国際ミッション・ボランティアのために(佐々木和之氏・ルワンダ)

28日(日)詩編144編 3～4節

私たちが神に問いかける究極の言葉は「人間とは何ものであるでしょう」です。神の偉大さや慈しみの深さを思えば思うほどに、小さく弱くされた人間を、顧み、親しんでくださる神の愛を思いたたえて歌うのです。神を見失い、マモンに操られる人びとは、繰り返し人間を王として、殺戮と暴力にもてあそばれていくのです。
シンガポール国際日本語教会（IJCS）のために

29日(月)詩編145編14節

世界中で起きている暴力、殺戮、破壊が報道される度に、何もできない自分を感じます。それでも主が知っていてくださることを信じて、友と共に祈ることができる幸いを思います。主は倒れようとする人を支え、うずくまっている人を起こしてくださる確信があるから忍耐強く祈ることができるのです。
アジアバプテスト女性連合（ABWU）のために

30日(火)詩編146編 4節

聖書は、人を神によって吹き込まれた「霊(息)」によって生きるものとしめます。ですから「霊」が去れば土に帰るだけの存在であり、どんな企ても終わるのです。死者には「霊」はなく、慰める行為も必要ないのです。だからこそ、「霊」のあるうちに互いに愛し合い、仕え合うことが求められるのです。
ライズ&シャイン（ネパール）のために

B ■ W ■ A ■ 女 ■ 性 ■ 部 ■ 世 ■ 界 ■ 祈 ■ 祷 ■ 日

(世界バプテスト連盟)

11/3
(月)

それぞれの場所・教会で世界中の祈りの課題をおぼえてお祈りください。加盟女性会にプログラム冊子をお送りします。